

ケニア北部

遊牧民レンディーレの 井戸掘りブーム

孫 暁 剛

はじめに

ケニア共和国の北部に広がる年間降水量200mm以下の乾燥地域では、人間が直接に利用できる動植物資源が乏しく、狩猟採集や農耕を生業とするには適さないため、主にラクダ、ウシならびに小家畜（ヤギとヒツジ）を飼養する遊牧民が暮らしている。レンディーレはラクダ遊牧で知られる遊牧民で、東クシュ系レンディーレ語を話し、人口は約3万人である。彼らは北ケニアにおける不安定な民族間関係やイギリス植民地政府による統治を経験しながらも、独立した民族集団の輪郭と生業としてのラクダ遊牧を維持してきた（Spencer [1973], Sato [1980], Schlee [1989]）。

ところが、1970～80年代にかけて、レンディーレを含めた東アフリカの乾燥地帯に暮らす遊牧民を対象に、国際機関や各国政府による大規模な開発・援助プロジェクトが行われた。私はこのような外的な影響によってレンディーレの遊牧生態と社会がどのように変化するか注目して研究を進めている。本稿では、水資源の開発をきっかけに

起きた「井戸掘りブーム」という近年の出来事を取りあげて、レンディーレが新しい技術と資源をどのように利用しているのかを紹介する。

1 遊牧と水の利用

レンディーレ社会は父系原理に基づき、二つの半族に属する九つのクランがある。各クランはサブ・クランをもち、サブ・クランは複数のリネージで構成される。一つのリネージには複数の世帯が含まれる。クランは外婚単位である。このような出自組織は、日常生活における協力関係や共同で遊牧を行う際に重要視されている。

レンディーレ・ランド（図1）は周囲を山に囲まれた低地平原である。標高は500メートル前後で、面積は約1万5000平方キロである。一年に2回の雨季（3～5月、11～12月）があるが、降水量が少なく、降雨の地域的、季節的変動も大きい。また早魃や集中豪雨といった異常気象が不規則的に発生する。植生は灌木草原と半砂漠草原が8割以上を占める。

レンディーレ・ランドで年間を通して使える水

場は、コラレの泉とポンプ井戸だけである。コラレの泉水はアルカリ性が強く主にラクダの給水に使われる。ポンプ井戸は1970年代頃にキリスト教のミッションがつくったものが多く、人々の生活用水に利用される。また、雨季には雨の溜まり水や山間部に流れる一時的な小川の水も利用される。

レンディーレは乾季に、ラクダには14日おきに、小家畜には3～4日おきに、そしてウシには2～3日おきに給水する。そして雨季には、ラクダや小家畜には給水せず、ウシだけに3～4日おきに給水する。各家畜種は給水間隔の違いによって放牧できる範囲が異なる。ラクダは水場から遠く離れて放牧できるが、ウシや小家畜は水場から日帰りできる範囲で放牧される。

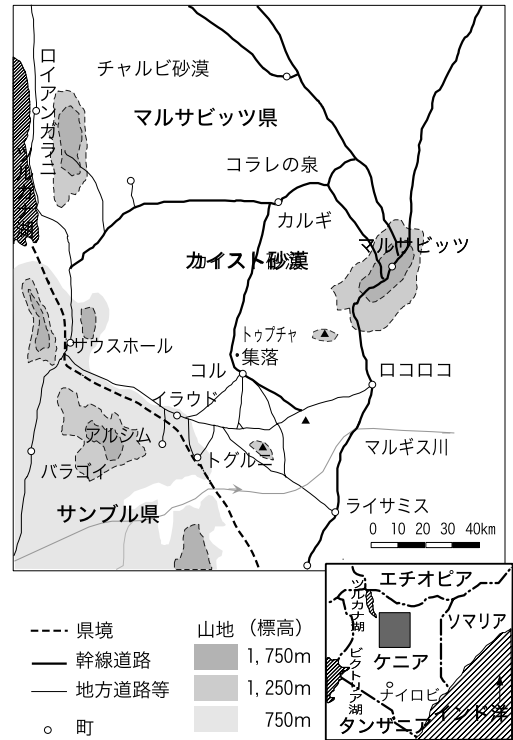
このように水場と牧草地の制約を受けながら、レンディーレは集落とともに放牧キャンプをつくり移動性の高い生活を送ってきた。しかし、近年の定住化政策や町の発展にともなって、集落の定着化が進んでいる。本稿にとりあげる井戸掘りは、後述するように定着した集落に住む人々の生活に重要な役割を果たしている。

2 開発・援助計画と井戸掘りブーム

1970年代の後半から80年代の初頭にかけて、レンディーレ・ランドを含めた東アフリカの乾燥地域は大旱魃にみまわれた。エチオピア南部では飢饉が発生し世界的に注目された。これをきっかけに、国際機関と各国政府による緊急援助が行われ、さらに大規模な開発・援助計画が展開された。

レンディーレ・ランドでは定住化や家畜の市場経済化などを目的とした開発計画が実施された。そのなかで、乾燥地の牧畜生産を制限する要因は水不足であるという見方にもとづく水資源の開発も行われた。GTZ（ドイツ政府系の開発機関）を中

図1 レンディーレ・ランド



（出所） 筆者作成。

心に地下水の測定が行われ、レンディーレが労働力を提供して数カ所に主に家畜の給水用の井戸がつくられた。

ところが、1980年代後半に環境問題が世界的に注目されるようになるにつれ、井戸の利用にともなう自然環境の破壊が指摘されるようになった。つまり、従来は天水に依存して移動性の高い遊牧を行ってきた人々が、井戸の周辺に集中することによって局地的な過放牧が起きるといった批判である。また、同時に実施された他の開発計画が遊牧民の協力と理解、あるいは予期していた成果が得られなかったために撤退しはじめたこともあって、水資源の開発も中止となった（Schwartz [1991]）。しかし、今までは地下水があることを知らなかつ

た場所に井戸ができたことは、レンディーレに大きなインパクトを与えたと考えられる。

私は1998年末からレンディーレ・ランドの中心に位置するコル（Korr）の町とその北西約7キロにあるトゥプチャ・克蘭の集落（図1）で調査をはじめた。「都市へ行くことがあったらハンマーを買ってきてくれ」と集落に住む既婚男性によく言われるので、目的を聞くと「井戸掘りに使う」という。そのときにはじめて集落の人々が自力で井戸を掘っていることを知った。集落の南約1.5キロのところにはキリスト教のミッションがつくったポンプ井戸があって、人々はそこから生活用水を得ているが、さらに南にある涸れ沢沿いで井戸掘りを行っていた。

図2は1998年から2001年にかけてトゥプチャ・克蘭の二つの集落とサーレ・克蘭の二つの集落がつくった井戸の分布を示している。涸れ沢の岸辺に沿ってわずか500メートルの区間に34の井戸が掘られている。2001年現在ではそのうちの20の井戸が家畜の給水に使われており、あとの14個は掘っている最中の井戸か、あるいは穴を掘って周りを石で囲んで「場所とり」をしているものである。トゥプチャ集落が利用する井戸は、98年には図2の①だけであり、②は掘削中だった。しかしながら2001年には使用中の井戸が六つ、掘削中の井戸も四つあった。井戸が密集している理由は、すでに水が出ている井戸の隣に掘れば、水が出る確率が高いと人々が信じているからである。

井戸はだいたい直径1メートル、深さ5～6メートルの堅穴だが、ハンマーと先端を鋭くした鉄の棒だけを使って岸辺の岩盤を砕いて掘るのは時間のかかる重労働である。一つの井戸を掘るのに通常2、3カ月もかかるが、集落の若い既婚男性を中心に人々は井戸掘りに非常に熱心である。

3 井戸の所有と利用

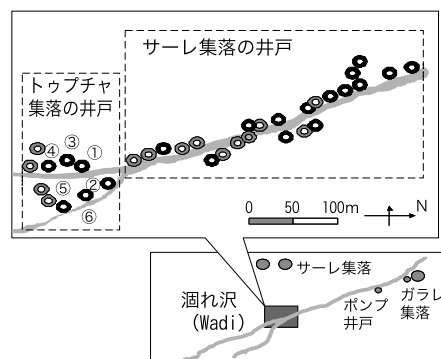
以下ではトゥプチャ・克蘭の集落が利用していた六つの井戸（図2）の事例から、井戸がだれによってつくられ、どのように所有され、そして利用されているのかをみてみよう。

1. 井戸掘りの作業者と井戸の所有形態

①の井戸は1992年頃に GTZ が行った測量にしたがい、あるリネージの既婚男性たちが共同でつくったものである。トゥプチャ・克蘭が利用する井戸のなかではもっとも古く、リネージの共同所有となっている。次にできた②の井戸は98年頃に別のリネージに属する6世帯の既婚男性によってつくられたもので、この6世帯の共同所有となっている。

③の井戸は1999年に同母兄弟である2人の既婚男性によってつくられ、④と⑤は、2000年から2001年にかけて井戸掘りを専門とするボランの男性によってつくられたものである。ボランはケ

図2 ガラレ集落の近くにある井戸の分布



- 使用中の井戸 (20個) ◎ 掘削中の井戸 (14個)
- ①～⑥：トゥプチャ集落が使用している井戸

(出所) 筆者作成。

ニア北部からエチオピア南部に居住するウシ牧畜民で、民族関係ではレンディーレと対立している。しかし、この男性は開発機関に雇われて井戸掘りをした経験があるので、レンディーレの間では「水のと場所と井戸の掘り方がわかる」との評判で、井戸掘りを専業としている。彼を雇う給料は井戸掘り期間中の食事と4500ケニアシリング (Ksh, 日本円で約7000円) くらいである。④の持ち主は父方平行イトコである2人の既婚男性で、⑤の持ち主は既婚男性1人である。④の持ち主は現金を、⑤の持ち主はオスの成熟ラクダ1頭 (大きさによるが、だいたい7000～1万 Ksh) をこのボラン男性に支払った。⑥の井戸は現在トゥプチャ集落が利用する井戸の中で最も新しく、同母兄弟の2人がつくったものである。

ここで二つの新しい現象に注目したい。ひとつは井戸掘りに人を雇うこと、もうひとつは井戸をリネージ単位で所有することである。レンディーレ社会では家畜の放牧に労働力が不足した場合、他人に自分の家畜を放牧させて、その見返りとして家畜を与えることはある。しかし井戸掘りのように現金で人を雇うケースはみられなかった。これは近年の現金経済の拡大による影響だと考えられる。しかしながら井戸⑤の持ち主のように市場価値では7000～1万 Ksh になるラクダで支払う場合もある。つまり家畜の市場価値を厳密に計算するような考え方はまだレンディーレ社会に完全には浸透していないと思われる。

また、レンディーレ社会における資源に対する諸権利の形態としては共同利用 (放牧地など) と個人所有 (家畜、家財道具など) とがあるが、井戸のようなリネージ集団による共同所有は報告されていない。この理由としては、井戸掘りの作業には複数の人々の協力が必要であること、また水が公共的な資源の要素をもつことなどが考えられる。

この新しい所有形態が今後どのように維持、継承され、あるいは変化してゆくのかは注目したいところである。

2. 井戸の所有者と利用者の関係

井戸が実際にどのように利用されているかをみるために、50日間に①から④の井戸でだれがどの家畜に給水したのかを調べた。期間中に計9群のウシと11群の小家畜が四つの井戸を利用した。一つの井戸では一日に複数の家畜群に給水する場合があるので、1畜群に1回給水したときに利用回数1と数えると、四つの井戸は50日間に合計197回利用された。

まず、井戸で給水した家畜の保有者と井戸の所有者との関係を、所有者本人、所有者と同一集落に住む人、そして所有者と別集落に住む人というように居住形態で区分してみた。全利用回数197回のうち所有者自身の家畜に給水したのは84回 (43%) で、全体の4割に過ぎない。所有者と同一集落に住む利用者を入れると計181回 (92%) になり、利用者全体の9割を占める。つまり、井戸は所有者と同じ集落に住んでいる人々によって利用されている。

次に、井戸の所有者と利用者の親族関係をみると、次表に示したように井戸によってバラツキがある。井戸①と②のように所有者がリネージ、あるいはリネージ内の多数の世帯である井戸より、井戸③と④のように兄弟や個人が所有している井戸のほうが、より広い人間関係の中で使われている。これには井戸の水量と家畜の給水パターンとが関係している。一日に給水できる家畜群の数は井戸の水量によって制限されていて、そしてウシや小家畜は2～4日おきに給水される。このため、個人所有の井戸では本人の家畜は2～4日おきにしか井戸を利用しない。つまり、個人の井戸は

出自からみる井戸の所有者と利用者との関係（50日）

	井戸の利用回数									
	井戸①		井戸②		井戸③		井戸④		合 計	
		%		%		%		%		%
所有者	57	70	0	0	14	24	13	45	84	43
同一サブクラン	0	0	25	83	21	37	0	0	46	23
婚 族	24	30	0	0	0	0	0	0	24	12
同一リネージ	0	0	5	27	0	0	14	48	19	10
同一クラン	0	0	0	0	13	23	0	0	13	7
その他	0	0	0	0	9	16	2	7	11	5
合 計	81	100	30	100	57	100	29	100	197	100
井戸を利用した 家畜群数	ウシ 3				ウシ 4		ウシ 2		ウシ 9	
	小家畜 4		小家畜 4		小家畜 2		小家畜 1		小家畜 11	

（注）（1）一つの井戸では一日に複数の家畜群が給水される場合があるが、井戸の利用回数は家畜一群が1回給水したときに1回と数える。

（2）井戸①～④の位置は図2を参照のこと。

ほかの人に使いわせる余裕が大きくなる。しかし、所有者以外の人に井戸を使いさせる見返りは、せいぜい井戸掘りや補強の手伝いにすぎない。また、井戸の水は家畜の給水以外にも集落の生活用水として使われている。この場合、トップチャ・クランの集落の住民だけではなく、井戸の周辺にある他の集落の人々にも利用される。このように、井戸の所有は個人レベルであっても、所有者が排他的に利用しているわけではない。

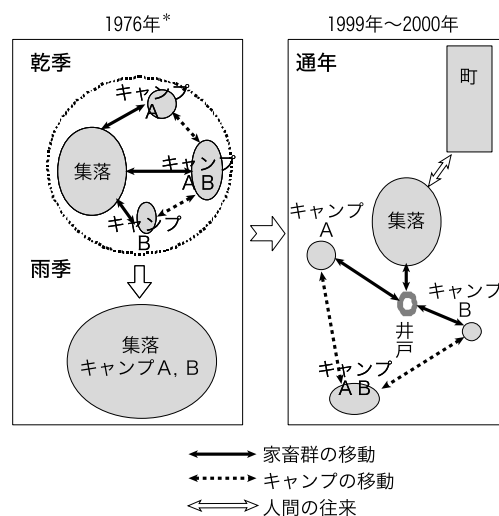
4 新たな居住様式における井戸の役割

井戸をつくるのは重労働であるし、人を雇うためには賃金あるいは家畜を支払う必要がある。しかし所有者が井戸を利用する頻度は、全体の4割にすぎない。にもかかわらず、井戸の数が急速に増え、実際に掘らなくても場所を確保しようとする動きもあるところから、井戸掘りには「ブーム」的な要素があることが読み取れる。しかしながら、近年におけるレンディーレの居住形式の変化にともなって、井戸の必要性は高まっている。

レンディーレ・ランドでは自然環境の制限によ

って高い移動性が要求される。図3は約25年前のレンディーレの遊牧パターンと現在のパターンを比較したものである。従来の遊牧には季節的な特徴がみられた。牧草が少なく家畜に給水する必要がある乾季には、年寄りと子供が水場のある場所に集落をつくり、未婚の青年や少女を中心に設営

図3 集落と放牧キャンプの離合集散の
パターンの変化



（出所） 筆者作成。*Sato[1980]。

される放牧キャンプは広い範囲を移動した。一方、雨季には家畜が植物の採食から十分な水分をとることができ、人間は家畜から豊富なミルクを得られるために、水場が重要ではなくなり、集落とキャンプは合流して牧草が豊富なところにつくられた。こうした集落と放牧キャンプの季節的な離合集散はレンディーレの重要な適応戦略の一つであると指摘されている (Sato [1980])。

しかし、近年の定住化政策や町を中心に展開した開発・援助の影響で、レンディーレの集落の大半は町の付近に定着した。私が調査したコルの町から半径15キロの地域には36の集落が分散している。定着した集落の周辺では多くの家畜を維持できないため、家畜はキャンプで放牧され、牧草と水を求めて移動する。その結果、集落ではミルクなどの畜産物にアクセスする機会は非常に少ない。この状況を改善したのが井戸である。井戸があれば少数のウシや小家畜を集落に残すことができる。また、放牧キャンプにいるウシや小家畜も井戸を使って給水できるので、2～4日おきに給水のために集落を通過する。このとき、キャンプでは集落のためにミルクを用意し、一方集落ではキャンプの食糧用に町から農産物を購入しておく。このように井戸は、集落とキャンプの新しい接点として重要な役割を果たしている。

おわりに

わずか3～4年の間に井戸はレンディーレの生活に定着するようになった。井戸掘り自体はレンディーレにとって新しいことではないが、ここでとりあげたように限られた場所に多数の井戸を集中的に掘ることは新しい現象である。井戸掘りのきっかけ自体は援助による水資源の開発であったが、いまではレンディーレが自発的に行ってい

る。

井戸の所有と利用の事例からわかるように、井戸は個人のものである一方で、広い人間関係のなかで利用されている。これは、従来のレンディーレ社会におけるものの所有と利用の特徴と一致している。レンディーレにとって経済の基盤である家畜は、世帯主つまり個人レベルで所有されている。しかし、畜産物は決して世帯単位だけで消費しているわけではないし、家畜の移譲や相続には緻密な規則が存在し個人だけでは決定できない。つまり家畜は個人所有であっても「広い人間関係」の中で利用されている。このように、従来の財に対する所有と利用の様式は、新たに現れた井戸にも適用されているのである。

今後、レンディーレにとってはじめての「不動産」である井戸をめぐる、その移譲や相続にどのような社会的な規則が適用されるのか、また本稿ではとりあげなかったが井戸掘りと利用は環境にどのようなインパクトを与えるのかについて注目していきたい。

〔参考文献〕

- Sato, Shun[1980] "Pastoral Movements and the Subsistence Unit of the Rendille of Northern Kenya: with Special Reference to Camel Ecology," *Senri Ethnological Studies*, No. 6, pp.1-78.
- Schlee, Gunther[1989] *Identities on The Move: Clanship and Pastoralism in Northern Kenya*, Manchester : Manchester University Press.
- Schwartz H. J. eds.[1991] *Range Management Handbook of Kenya Volume II, 1 Marsabit District*, Nairobi : Ministry of Livestock Development.
- Spencer, Paul[1973] *Nomads in Alliance: Symbiosis and Growth among the Rendille and Samburu of Kenya*, London : Oxford University Press.

(ソン・ショウガン / 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)